
夏と、煙と、物書きと

芸熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏と、煙と、物書きと

【Nコード】

N7501M

【作者名】

芸熊

【あらすじ】

お題SS

お題…日本家屋×物書きさん×風鈴×猫×夏終わり頃の夜

結構難しい…。

和風モダンに仕上げてみました。

月と太陽が同居する曖昧な時間。
遠くの方では入道雲が山を作り、今にも夕立がきそうだと。

「こりゃ、一雨くるかな。夕涼みなんてしていたらえらいことになりそうだな」

私の隣で猫も顔を洗っている。
どうやら本当に一雨きそうだと。

「どうしてお前はこんな時に顔を洗うかねえ」

なおう と一つ鳴き、返事をした猫は顔を洗うのを止めた。
小さな筆台を縁側から障子の内側に移動させると、入道雲は遂に
近くまで迫っていた。

やはり入道雲は早いなあ、などと感心していると閃光があたりを
一瞬照らす。

大粒の雨が屋根を叩き始めた。

「うひゃあ、思った以上に凄い雨だな」

しかし入道雲の動きは早い。
ほんの三十分もしないうちに夕立は去っていった。

――ちりん

雨に濡れた地面が、むせ返るような土と草の独特の臭いを生み出す。
それを涼しい風が屋内に運んできた。

この臭いも、あと少し経つと嗅げなくなると思うと感慨深いものを感じてしまう。

「さて、また夕涼みでもしながら原稿を仕上げるか」

再び筆台を縁側に戻し、頭を悩ませる。

そんな私の事なぞ気にも留めず、猫は私の膝の上でごろごろと喉を鳴らす。

「ははは。お前は気楽でいいなあ」

筆台に向かい、原稿に向かい、文字に向かい、どれくらい経っただろうか。

ふと外を見ると、夕焼けが夕闇に変わるところだった。

花火でもしているのだろうか。遠くでは子供のはしゃぐ声が聴こえる。

鈴虫や蟋蟀の鳴き声も混ざりはじめ、いよいよもって夏の終わりを感ずる。

「ふう。一服するか」

冷たい麦茶を茶碗に入れ、口にする。

煙草盆を引き寄せ、煙管に刻み煙草を詰める。

火を着け、ゆらりと煙をあげると

――ちりん

涼しい風がたちまち煙を家の中へ運んでいった。

膝の上で寝ていた猫は怪訝な顔をし、どこかへ歩いていった。

「はは。すまないな。さすがの君でも煙は嫌だったか」

「おおっと、そろそろ線香でも焚かなければ、虫に食われてしまう

な」

煙草盆に煙管を打ち付け灰を捨てる。

「はて、どこに置いたか。昨日も同じように探したのに、つい忘れてしまう」

頭を悩ませ、筆筒の上に目をやると線香が置いてあった。

「おお、そうだそうだ。分り易い位置にと思って筆筒の上に置いたのだったな」

線香に火を着け、筆台の隣に置く。

そしてまた私は筆台に向かい頭を悩ませた。

——どどん　ぱらぱら

遠くで今年最後の花火が咲いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7501m/>

夏と、煙と、物書きと

2010年10月10日02時20分発行